フイリピン滞在記 ③---マニラのチャイナタウンを歩く

為我井輝忠

世界中、大都市と言われるところにはチャイナタウン（中華街）がある。ニューヨーク然り、ロンドン然り、パリも、否、ジャカルタ、クワラルンプール、横浜と例を挙げればきりがないほどである。かつて訪れたことがある南太平洋のフィージーにも小規模ながら中国人のコミュニティがあった。なぜこんなにも世界中にチャイナタウンがあるのか不思議に思うが、それは歴史的に見れば、大いに肯くことが出来る。

王彬のフイリピン独立に大きな役割を果たしたことを記念した銅像

19世紀末から中国は欧米諸国の進出によって半ば植民地化され、それと共にそれまで海外に出ることが出来なかった中国の人々が労働力として欧米諸国を始めアジアのその列国の植民地に駆り出された。その結果中国人は世界のあらゆるところに住み始め、やがてそこに自分たちのコミュニティーを作り上げた。次第にそこに一つの街が出来、チャイナタウンが形成されてきた。彼らにとって頼れるものは同胞だけであった。

フイリピンの場合もマニラに大きなチャイナタウンがある。先日初めて訪れてみたが、他のチャイナタウンとは若干違うような気がした。それはロンドンや横浜のチャイナタウンが半ば観光地化し、観光客が多く訪れる人気スポットになっているのに対して、マニラの場合はあまり観光客の姿は見えず、地元の人々の姿しか見かけなかったことである。あまり華やかさや活況が見られない。それは生活密着型チャイナタウンとでも言ってよいのではないだろうか。

Ongpin St.（王彬通り）と書かれた道路標識

スペイン統治時代、スペイン人はイントラムロスという城塞を中心に都市（城塞都市）を築き、中国人はその中に住むことが出来なかった。しかし、彼らは商売を続けるためにイントラムロス近くに集って住むようになり、これがチャイナタウンのそもそもの始まりであった。

チャイナタウンを歩いていると、Ongpin（王彬）と書かれた文字をしばしば目にする。通りの名前（Ongpin Street）だったり、商店（Ongpin Market）や場所の名前などに使われていたりと

チャイナタウンではお馴染みの牌楼

チャイナタウンでの昼食

商売そっちのけで眠りこける男性

かなり多い。一体この人物はどんな中国人だったのだろうか。大いに興味を感じた。

チャイナタウンの一角に「比律嬪独立先賢　王彬先生紀念像」と書かれた彼の銅像が建っている。初めて目にした名前であるが、フイリピンの独立に寄与したとあり、大いに興味を覚えた。インターネットで調べてみると、あまり詳しいことが出ていない。せいぜい生まれたのが1847年、没したのが1912年で、正式なフイリピン名は Don Roman Ongpin（ドン・ローマン・オンピン）とあり、“a Chinese businessman who gained fame for his financial support for the rebels during the successful uprising of 1896 against Spain”（1896年スペインに対する反乱期に反徒に対して経済的な支援を続け広くその名声振りが知られた中国人ビジネスマン ）ということが書かれている程度である。しかしながら、フイリピンではスペインからの独立時に果たした彼のことや彼の家族についてはよく知られていて、彼の功績を讃えるために銅像（比律嬪独立先賢　王彬先生紀念碑）が建てられたり、街の名称に彼の名前が付けられたりしたのである。

一方、チャイナタウンは日本が爆撃を加えたことも知られている。太平洋戦争時に日本軍がマニラを砲撃した際、このチャイナタウンも大きな被害を受けたそうであるが、今はそのような傷跡は見られない。ただ街の一角に「華僑抗日烈士記念碑」があり、当時の在比の中国人青年たちの抗日の様子をわずかに知ることが出来る。

中国の旧正月を祝う春節が今年は2月19日から始まったが、フイリピンではこの日は祭日で休みであった。それで私はぜひともこの日にはチャイナタウンに行って、中国風の正月風景を見てみたいと考えていたので、訪れてみた。その時の詳しい様子は次回に報告したい。

（続く）